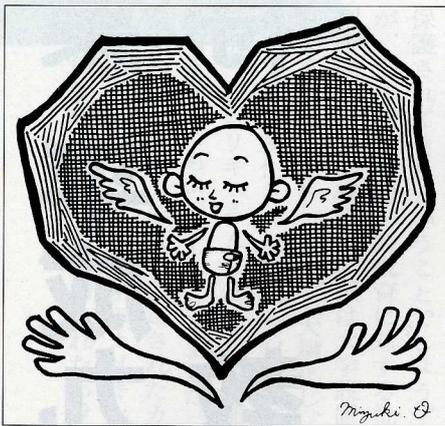


# 子どもと育つ

文・葛原昌子 (学校教育研究科)  
Kuzuhara, Masako



一九八〇年代初めに学生時代を送り、高校に勤め始めて十年、再び学生に戻る機会を得たのは九四年のことだった。生活費の心配もせずに学生生活を送れるなんて、何というぜいたく！何という幸せ！と手放しで浮かれたのも束の間、九五年初夏の出産に伴い、一年間の休職と休学を余儀なくされた。九六年春に職場と大学院に復帰、目下修士論文作成中である。

二年ぶりの職場復帰で、あれこれに対する自分自身の視点の変化を感じると共に、子どもを預かっていただいている保育園の姿勢に、考えさせられることが多い。

先日、担任の保母さんとの個人懇談があった。保育園での様子を一通り話された後、家庭での食事と排泄のしつけのことを尋ねられた。子どもはその時一歳二か月で、食事は親がスプーンで食べさせ、おむつははずすために「おまる」に座らせるトイレ・トレーニングは、まだ始めていないと答えた。

食事については、保健所からの指導で、七、八か月ぐらいいからスプーンを自分で持たせてみましょうと言われて実際やってみましたが、おもちやにするだけであった。また、おむつを取ることに限っては人によってまちまちで、私としてはまだ考えがまとまらないのですが、と逆に相談を持ちかけた。すると次のような答えが返ってきた。

「自分でスプーンを持って食べるようにさせるのは、遊んでいる時の手首の運動機能の発達状態を見て始めればいい。おむつを取るのも個人差はあるが、一歳半ぐらいいならないと排泄感覚がないので、それ以前の幼児にとっては負担になると思うが、家庭で始めているのなら、園でも始めないといいないでしょう。」

「保育園ではこのようにしますから、ご家庭でのご協力をお願いします」という「通達」方式ではないことに、何かほっとするものを感じた。懇談が、保護者の勤務時間をはずして午後六時からであったことにも、保育園側の心遣いが見られた。

「平素は、本校の教育にご理解とご協力をいただきありがとうございます」——こういう文面を保護者に出すことに違和感を覚え出したのはいつ頃からだったろう。「主導権は学校にあり、生徒や保護者はそれに従う」という図式を感じて、これでもいいのだろうかという疑問に思ったものの、ではどのような関係がよいのかという具体像は思い描けなかった。

親権は親にあるのだから、親が教育方針を持ち子どもを養育するのが基本である。しかし、家庭外で過ごす時間が長くなるほど、子どもの様子はつかみにくい。親もどうしたらよいか考えあぐねることがある。だから、考えを整理できるように相談に乗るといったような、サポート体制が望ましいのではないか。

アドバイスを受け、決断するのは親である。そして、当然その責めは、決断した者が取らねばならない。その自覚が、いざ自分の意見を表明し始める子どもにも、大事な決断を委ねることを可能にするのではないのだろうか。自己決定権の所在を早くから明らかにしておくことは、主体的な人格形成に欠かせないことである。

そんなことをつらつら考えているところへ、同僚から、毎日新聞の九六年六月二十七日と同二十八日付の「記者の目」という記事を渡された。高校生の「茶髪、ピアス」に対する、賛成意見と反対意見に関するものである。双方とも、親としての立場と社

会の一員として学校というシステムを考えた立場が不明瞭に混在したきらいはあったが、なかなか面白かった。

親として子どもに「茶髪、ピアス」を許すかどうかは、個々に任されてよいと思は思う。というより、止めるにしても「持つて生まれてきた形を変えて欲しくない」という願いは親にしか伝えにくく、しかもそれは「願い」でしかあり得ない。自分が産み育てたとしても、基本的に子どもの身体は子どものものであるからだ。

一方で、それを承知しながらも、親である自分は納得できないからという理由で、ある一定の年齢まで断固として許さないというあり方もありうる。

学校が、厳格な服装の規制を続けることには、無理が生じてきている。なぜそのような規制をしようのかというところで、多くの人間を説得できるものを持たないからである。それに拘泥し続けるよりは、むしろ「自己表現」の一環ととらえ直し、個人に任せてしまえばよい。

その時間題となるのは、では何をもち、たとえ、高校の課程を修了したと認定するののか、といった評価基準であろう。その評価基準を持ち得ないから現状では、服装や出席日数といった「努力」や「心がけ」を評価の要件にしているとも思える。

おっぱいだけを欲しがっていた子どもが、今では欲しい食べ物を感じ示すようになってきた。子どもの成長を日々感じながら、何となくこの子に「制服」は着せたくないなど思っている私がいる。これから先どんな気持ちで湧き出てくるか、そして、学校教育に携わる者としてどういう決着をつけていくことになるのか、今から楽しみである。